

耳鼻咽喉科

診療科の紹介

当科は外来診療と、手術および急性疾患の治療を中心に入院加療を行なっています。外来診療は、中耳炎、慢性副鼻腔炎等の一般的耳鼻咽喉科疾患の治療から、幼児難聴の診断、めまいの診断治療、頭頸部腫瘍(疑い)の検査と診断など、幅広く対処しています。

午前中は常勤医師1名体制で一般外来診療を行なっています。午後には手術および予約診で前庭機能検査(めまい検査)ファイバー等の検査、外来手術(ポリボトミー、鼓膜チュービング、生検等)、入院患者さんの診察等を行なっています。咽喉頭や頸部等の急性炎症やめまい、突発性難聴、顔面神経麻痺等を入院の上、精査治療しています。また、声帯ポリープ、副鼻腔炎、扁桃炎等幅広く手術を行なっています。

取り扱う主な疾患

外来では中耳炎、副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎、扁桃炎、咽頭炎などの耳鼻咽喉科一般疾患を取り扱っています。また、急性扁桃炎、扁桃周囲膿瘍、突発性難聴、内耳性めまい、顔面神経麻痺、声帯ポリープなどの入院管理が必要な耳鼻科疾患や耳鼻科手術に付随するものに対応しています。

当科の特徴

小児科領域に強い当院の特性を生かし、耳鼻科症状を有する小児については、小児科に加え耳鼻科でも診断、検査、治療、手術を行ないます。新生児スクリーニング検査で、聴力に問題があることが疑われる場合、ABR検査を含めた聴覚精密検査を行ない、疑わしい場合は、早期に北九州市立総合療育センターなどの療育機関と連携し、早期の補聴器装用による聴覚の問題解決または軽減を図っています。

手術については、小児の反復性扁桃炎、睡眠時無呼吸症候群に対し、積極的に手術を行なっております。また、当院形成外科で口唇口蓋裂の手術を行なう際、合併する耳管機能不全、さらには慢性滲出性中耳炎に対し、乳児期の鼓膜チューブ挿入手術を行なっています。言語発達の遅れが疑われる幼小児に対し、鼻咽腔ファイバーによる鼻咽腔閉鎖能の検査を行ない、当院形成外科および療育センターとの連携で、適切な治療方針を決定しています。

スタッフ紹介



耳鼻咽喉科主任部長
麻生 裕明
あそう ひろあき